

「生涯現役社会」の過ごし方を考える

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

①「今年105歳のきんさん、ぎんさんはテレビのインタビューで『稼いだお金は老後に備えている』と答えた。暦年齢による差別は、米国では agism(エイジズム)として、人種による差別 racism(レイシズム)、性による差別の sexism(セクシズム)と並び、三大悪徳として社会の改革的的になっている。日本の anti・agism(アンティ・エイジズム)キャンペーン(年齢による差別に対する反対運動)も、今年からよりはずみをつけて行われる必要があるのではないだろうか。」

※以上、木谷健一筆、NHK テレビ「英語ビジネス・ワールド」1998年4月号テキスト67ページより引用。

②「高齢者の就業環境の整備を行うことによって、21世紀の日本が豊かで安心して暮らせる社会になるよう準備しておくことが重要である。平均寿命が伸び、健康・体力面で就業可能な年齢が高くなってきた今日、引退年齢を引き上げてより長く働くというのは、自然なことである。もちろん個人によってはより早期の引退を選択することもあり得るだろう。人生において、いつ仕事を離れ、いつ余暇を楽しみ、いつ学ぶかといった問題には多様な選択肢が用意されているべきであろう。これまで、日本での働き方は必ずしもそのようにはなっていなかった。それは、新規学卒者等の若年層の採用を中心とし、中途採用市場が十分に発達しておらず、また年齢によって立場、役割が決まりやすい人事体系となっているなど、その意味で『硬直的』であった、今後は高齢者が急増することを契機として、こうした状況を変え、長期的には、年齢による就業上の制約の少ない、いわば『生涯現役社会』の方向へ向かうべきであろう。」

※以上、ESP1998年12月号「特集・国民生活白書」60ページ、61一ページからの引用。編集発行、社団法人「経済企画協会」TELO3(3592)3881 定価900円。

③105歳になっても「老後」のためにお金を稼ぎ続ける「きんさん、ぎんさん」は生涯現役社会の最高の模範で尊敬に値する。

今回は年の始めに「一生働き続けること」について考える。

2. 生涯現役社会を考える

①「生涯現役社会」を考える前に、聴きなれないかもしれないが agism つまり「年齢による差別」をなくすことを考えないわけにはいかない。

欧米では、よく勉強した人ほど「あなたは何歳ですか」と年齢を質問する人は少ない。生年月日

などは個人のプライバシーの究めつけであり、本人が自ら口にする場合以外は他人が質問するなどもっての外、品性に欠けるばかりでなく、質問すること自体が人間の尊厳を傷つけると考える人が多い。

根掘り葉掘り、年齢や家族構成、出生地など質問し続けたら、目の前から話し相手が一人もいなくなるばかりでなく、裁判に訴えられ、考えられないほど高額な損害賠償や慰謝料を支払えとの判決を受けることを知っている。「おいくつですか」「お年の割にお元気ですね」「お若く見えますね」「お元気でいつまでもお過ごし下さい」などという表現は、言われる相手からすれば、あまり愉快でない場合が多いかもしれない。

まして、「年だから無理だ」などという表現は、言われる相手からすれば「人間存在の否定」につながる。話すほうも、自分の年齢は自ら告白する必要は少ないと思う。「私は何歳です」と言った瞬間に、年齢差のある話し相手は身構えてしまい、コミュニケーションが急に進まなくなる場合が多い。「私のような年になると」「年がきてしまって」「今の若い人は」などなど自ら年齢のことばかり口にする人のそばには、私は近づかないことにしている(相談されている場合は別だが)。

職場では、業務上の結果を出すことがすべてである。「仕事の相手に年齢を質問すること」や「年齢を自ら告白すること」は、業務上の結果を出すこととは全く関係ない。

②「きんさん・ぎんさん」ほどの高給ではなくてもいいから、何歳になっても「毎月現金収入」を得るように努めることは素晴らしいと思う。

「60歳台は週休3日で4日働きに出、70歳台は週休4日で3日働きに出、80歳台は週休5日で2日働く。90歳台は週休6日で1日働きに出、100歳台は自由にしたらよい」というのが、休日に対する私の考え方だ。もちろん、気力と体力が充実している人は、休日を少なくして、働く日を多くすればよい。ちょっとしんどい人は、休みを多くして働く日を少なくすればよい。死亡する何日か前まで働き続けることが、仕事の好きな職業人として最高の生き方ではないかと思う。

趣味やボランティア活動、旅行やスポーツは、仕事の合間を縫って行ってこそ楽しい。60歳をすぎたからといって、元気なのに90過ぎまで30余年も遊びほうけるのは、単なる「なまけ者」に過ぎず、子どもや孫の教育上よくない、と考える人も多い。

ゲートボール、ダンス、カラオケ、旅行、日帰り温泉、病院通いにうつつを抜かし、飲み切れないほどの薬を仕分けしている姿は見苦しい。もっと「シャン」とできる方が多いのであるから、がんばって頂きたい。

③行政でも、福祉や教育などにはもっと積極的に60歳以上の方を活用すべきだ。カウンセリングや部活動の指導などは、退職した先生方にたのめば、一発で解決できるかも知れない。退職した先生方も、近くの学校がうまくいっていないとのうわさを耳にしたら、放っておかないでボランティアとして手伝いにいかれたらどうか。

企業でも、60歳以上の方のできる仕事をさがし、どんどんまかせるべきだ。企業に仕事が無かったら、なげいてばかりいないで自ら仕事をさがし、どんなに小さくてもいいから60歳以上での創業を目指すべきだ。「自らの運命は自らが切り開く」と自覚し智恵を働かせれば、仕事など山のように見つかる。動物好きの人は、各家庭でかっている動物の世話を留守のときだけその家でしてあげることでも仕事になる。欧米では犬の散歩業などは大盛況だ。

一部屋500円でしてあげるそうじ代行業や、子どもが小学校から帰ってくる時間に家でまって

いて、おやつを食べさせてあげる仕事などは、働くヤングママを支援する大事な仕事だ。

あまり欲を張らなければ、世の中の人々がやって欲しい仕事は半径 500 メートル以内に山ほどある。知恵をしぼって仕事をさがし出し、勇気をもって PR しつづけることをおすすめする。

- ④ 60 歳になるまで、あと何年かある人々はどうしたらよいか。きんさん、ぎんさんのように 100 歳すぎまで生き続けると思い、60 歳すぎから死ぬ間際までの 40 年間以上をどのような生き方をしたいかを真剣に考え、自分ができうる最大の準備をすること。

私などは、65 歳すぎになったらワシントン・DC のブルッキングズ研究所のような本格的な研究所を新しい首都につくり公共政策の研究を始めようと決めているので、今の仕事をしながらも非常に面白く現在を送っている。これからまだ何十年も準備期間がある。みなさんもがんばって頂きたい。

3. おわりに

- ①経済企画庁で毎月のように出す白書類を閣議発表とほぼ同時刻に入取し、当日各白書執筆責任者から直接解説が聴きたかったら、(社)「経済企画協会」が実施している「月例経済セミナー」(会場は東京の JR 市ヶ谷駅近くの「アルカディア・市ヶ谷」が多い)に出席するとよい。但し、前出の電話番号に電話し、会費を払い、会員にならせてもらう必要がある。すべての経済企画庁から出る白書類を閣議発表行一週間以内に自宅に届けてもらいたいだけなら ESP を定期購読(一年に 7650 円)することができる。

- ③今春統一選挙に出馬予定の方々(現職も含めて)で、ESP を定期購読していない方がいたら年に 7650 円支払って是非自宅に毎月届けてもらい、じっくり時間をかけて読み終えてから議員活動や市長町村長としての仕事をして頂きたい。

公務員や学校の先生、マスコミ関係者の方、街づくりや地域経済に関心がある方、J・C 等で政策提言などしたい方々にとり、月刊雑誌「ESP」の自宅での定期購読と熟読は「基本のキ」と考える。

- ③本当によく勉強してから書かれているのが経済企画庁から毎月のように出る白書であるから、現代的な問題を深く考えたいのなら、読まずには済まされないものと思う。又、時間とお金に余裕があれば、月に 1 ~ 2 回開かれる「月例経済セミナー」に出ると更に勉強になる。(各県からは毎回 1 ~ 2 名しか参加していないのは、残念だ。)

- ④今年の「みにむ」の「開倫塾の時間」のページでは、読者へのプレゼントとして、せんえつかも知れないが、読めばためになる雑誌や私がいつも出ていてためになると思われる勉強会をすこしずつ紹介させて頂く。お楽しみに。